同窓會委員當選者氏名

改正会則に随い本会委員選挙に関し、(イ)候補者銓衡委員二十名を挙げて、前号本紙所載の候補者を定め、(ロ)一般選挙により中学高等学校部門より二十名大学専門学校部門より二十名、(ハ)委員会推薦により二十名全数六十名の委員を決定しました。当選委員氏名は次の通りであります。（ABC順）

阿部欣二、阿部利吉、阿部隆、阿部豊吉、相沢近男、赤城燊、秋保孝次、安藤安浅石正太郎、中鉢長太郎、藤本祐四郎、花輪庄三郎、羽田勲、樋口光平、本間正雄、本間良雄、洞口茂、五十嵐正躬、伊藤可平、和泉幸一郎、鎌田昌次郎、龜山耕司、菅野勝治、刈田仁、小林与兵衛、小平国雄、小藤孝正、児玉省三、黒沢孝平、松山国夫、三品鼎、茂木德郎、武藤徳郎、名生昇二上一覚、二関敬、野口一郎、小野小二郎、小山田正直、大原菅一郎、大石栄一大岡進、佐久間六、桜井亮英、佐藤幸蔵、佐藤三太郎佐藤貢夫、庄司一郎、島香直次郎、島崎金彌、清水広成、菅原汎、菅原弘平、鈴木正毅、鈴谷一男、田口誠一、高橋清久、舘岡剛、津田都、上野恭（以上）

教務日誌抄

〇大学の部

九月三日　本日より夏休後の授業に入る。

九月五日　青山学院大学生を本学礼拝堂に迎えて、礼拝を共にし、終つて対青山学院大学定期戦の開会式並に歓迎会を行う。午後六時半より礼拝堂に於いて同志社大学グリークラブの音楽会が開催された。

九月六日　午前九時より、野球、蹴球、ラクビー、卓球、バレー、ボール、籠球、陸上競技、ボクシング、庭球、の九種目にわたつて伝統に輝く真摯なプレーが展開された。本学は野球、サッカー、ラクビー、卓球の四種目に優勝したが、総合得点五―四で惜しくも遠来の青山軍に覇を譲つた。

九月十二日　第一学期試験に関する要綱を学生に発表。

九月二十日　大学、短大共本日より第一学期試験に入る。

九月二十七日　第一学期試験を終了し、十月六日まで試験休暇に入る。

十月八日　第二学期授業開始。

十月十一日　世界的平和運動者レスター女史来校講演された。

十月十二日　本日より一週間に亘つて、大学、短大共学期試験の成績発表を行つた。

十月二十三日　東京女子大学長斎藤勇氏来仙を機とし本学院にお招きして、院長室に於て英語科教員を中心として座談会を開いた。

十月二十四日　礼拝堂において松本卓夫氏の講演があつた。本日より一週間に亘つて九州大学高橋正雄教授の「世界経済論」に関する講義が行われた。尚短大生も同期間中特別講演をされた。

十月二十七日　本日より十一月二日まで石田教授の保険論に関する講義が行われた。

本学学生会E、S、S主催北日本高等学校英語雄弁大会が開催された。参加校三十余校にのぼり盛会を極めた。

十一月一日　故院長夫人マーガレット、アンケニー女史は十一月一日午後三時五十二分着列車で東北、宮城両学院教職員並に同窓生及びキリスト教婦人会の出迎えをうけて帰仙致されました。今後余生を仙台で送られます。

十一月二日　日本基督教団教師石川四郎氏講演された。

十一月三日　学生会弁論部主催北日本邦語弁論大会が開催され参加校六十校を数えた。本年は特に文部大臣賞が授与された。

十一月十日　本日より一週間に亘り大学、短大共東京理科大学松月秀雄教授による教育原理の講義が開講された。

十一月十二日　前同志社大学総長湯浅八郎氏来校講演された。

〇中高の部

八月二十八日　転入者及第二部編入者に対し考査を施行する。

八月三十一日　六年放課後模擬考査を実施する。

九月一日　礼拝後八月分の出席率の報告あり九八、八五%。

転入学者の転入学式挙行。

九月三日　第二部編入生入学式挙行。

九月四日　絵画展覧会開かる。放課後青年会総会が開かれた。

九月六日　生徒に対し南保健所に依頼してレントゲン写真検査を行う。

九月八日　放課後六年適生検査模擬試験を行う。

九月十一日　放課後理科研究会例会の折渡辺牧師の説教があつた。

九月十二日　岩手高校教員及び生徒来校午前中参観した。

九月十三日　放課後映画の見学があつた。

九月十七日　涌谷高校長、教員及びP、T、A役員十五名の参観があつた。北海道函館市教育長中川通氏（大正七、中学部卒）外一名も参観した。

九月二十二日　市内高校訓育打合会が本校で開かれた。Y、M、C、A作並キャンプが放課後から行われた。

九月二十七日　宮城県高校社会科研究会が午前九時から開かれ五十七名の来校者があつて非常に盛会であつた。

九月二十八日　放課後六年第四回模擬考査が行われた。

九月二十九日　放課後昨日に引続き六年模擬考査。

九月三十日　事務員伊藤恵美子退職。

十月一日　伊藤隆先生講師として勤務される。

十月二日　放課後月浦校長の録音をきく。

十月三日　事務員清水暁子就職。

十月四日　校長先生の録音を生徒にきかした。

十月五日　故シュネーダー院長十三回忌について講話あり正午から墓参した。

十月九日　礼拝後平和運動者レスター女史の講演があつた。

十月十三日　創立六十六周年記念大運動会が盛大に挙行された。

十月十五日　創立記念式をあげ栗原基先生の記念講演があつた。式後一同北山の校祖の墓におまいりする。

十月十九日　放課後六年模擬考査が行われた。

十月二十三日　第二部前期考査開始された。

十月二十四日　中高校前期考査開始された。

十月二十七日二十八日　基督教々育同盟北海道東北地区協議会及び修養会が宮城学院で開かれ教職員が参加した。

十月二十九日　前期考査終了。

前院長アルフレット、アンケニー先生の埋骨式

小田忠夫

〔寫眞說明〕埋骨式、向つて右ミセス●アンケニー　左赤城牧師

昨年八月病後静養のため帰米の上、夫人マーガレット女史の令妹クラ、女史（故シュネーダー先生の第三女）の許に於て、ひたすら静養中であつた前院長アンケニー先生は、夫人の手厚い看護に見守れつゝも、去る二月二十六日六十四才の寿齢を以て米国ニューヨーク州、ブルックリン市で永眠せられた事は既報の如くでありますが、其後去る十一月一日、御遺骨がマーガレット夫人と共に仙台市光禅寺通の自邸にお帰りになつた。夫人の御意志では、已に本葬は米国に於て執行済なので、仙台では埋骨式だけに止め、然も成べく簡素に執り行い、墓地は故人の遺言により当市北山墓地のシュネーダー家の墓域内に埋葬したいとの御趣旨に基づき、去る十一月二十五日午後二時、東北学院葬をもつて埋骨式を執り行つた。会葬者約三百名。

埋骨式執行順序

一、讃美歌（三三五）　同
一、聖句朗読（　赤城泰
一、聖書朗読（ロマ書八章一―一六
五。一八。三七―三九）三八―一三
一、祈祷　右同
一、讃美歌（二七五）　右同
一、追悼感話　東北学院代表　小田忠夫
日本基督教団代表　渡辺良亮
宮城学院代表　西山貞
ミッション代表　シップル
〃　シップル
一、祈祷
一、埋骨
一、頌栄（五六八）　同
一、祈祷　クーリテ
一、遺族挨拶　ミセス・アンケニー
一、会葬御礼　東北学院長　小田忠夫

なお夫人はミッション関係の勤きを続けられる筈にて、寂しさの中にもご元気でお出になります。

島崎藤村の思い出

小村武治

小松先生は明治三十年普通科卒業東京帝大英文科出身YMCA主事開拓者主筆、立教大学教授等を歴任今年七十四才の先輩。

藤村先生のわが学院に来任されたのは明治二十九年で在職僅かに一年に過ぎなかつた。丁度私共六人（井上、小川、川中、松尾、木山及び私）の卒業前の一年間に当るのである。当時先生はまだ二十五才の若さで我等晩学の学生とは大した違いがなかつたように見えた。先生は信州小諸附近の神坂村に生れ明治二十四年二十才で明治学院を卒業し、翌二十五年巌本善治氏主宰の女学雑誌に関係され同二十七年「女学雑誌」の分身である「文学界」同人として盛んに麗筆を揮われたものだ。創刊後間もなく独立し得るように成つてからは益々文壇に重きを置かれる詩作者たる途が開かれるに至つた。ところが先生の家庭の生計振を窺えば先生十三才の時、厳父は長逝され、令兄があつてもまだ独力で母を養うことが困難な状態に在り、随つて先生は専心詩作に没頭することが叶わぬので一時母を兄の許に置き地方に出て働いて得た収入の幾分を割いて仕送りする必要に迫られていた。そこに丁度欲り役ともいうべき作文担当教師の仕事が仙台に見出された。これ即ち島崎春樹先生がわが学院から作文教師として迎えられる機縁となつた次第である。

由来わが学院は基督教主義に拠れるいわゆるミッションスクールであるから隅々まで宗教的雰囲気が漲り、又何れの科目にも基督教的精神の浸透を図ることに専ら努力が払われて来たのであるが当初から特に主力を注いで来た学科は何というても英語科であつたといえよう。此事は教授陣に内外優秀の教師を集められたのと米国直輸の所謂舶来図書が数多備え付けられたのを見ても明かである。次に重きを置かれた学科は何かというにそれは作文科であつたといえよう。即ち予科時代の私達の作文受持先生は漢文専攻で而かも国語にも通暁された松浦風之進先生であつたが旧本科一年に当る普通科四年頃からは石田祐安先生が作文の専任教師として来任せられたが暫らくして神学部の教授として移行された結果、わが島崎先生の就任を見る事となつたのである。誰人の紹介に由つたかは知らないが押川先生と巌本先生との親しかつた点から見て或は巌本先生の推薦に由つたのではあるまいか、それは茲では問題としない。島崎先生を頂いていた当時の学生としては格別記憶に残る程の深い印象を持つていないが其風貌は何う見ても詩人らしい純真にして温雅而も冒すべからざる謹厳さを備え所謂文士気質ともいうべきずぼら性がなく教育者に相応しい几帳面な処があつた。先生の就任当座の時間には坪内逍遥博士著「文学その折々」の中から「人生四季」と題する可なり長い一文を黒板に書いてノートに書き取らせ、何遍も消しては書き書いては消し能筆を揮われたものであつた。これは単に模範的文章として示されたものゝようであつたが、後年私が坪内博士の文章が好きになつたのはその時からであつたと思われる。次に先生の目を通された唯一つの作文が今手許に残つているが、それを見ると評点代りに「菊」という文字が文題「菅原道真論」の直上に記されている。何ういう意味か分らぬが余り悪い評点でもなかつたらしい。

先生の仙台在任一年間は極めて多忙であつたに相違ない。それは処女作であり出世作である詩集「若菜集」は明治三十年先生が名掛町の三浦屋という宿屋で書かれたものであつた事でも明らかである。即ち仙台一ケ年間の滞在は後年の大藤村を作り上げる土台として役立つたというて過言ではなかろう。高山樗牛、土井晩翠両文豪揺籃の地たる青葉の都は島崎藤村の産婆役を務めたのだともいわれるだろう。わが学院に作文教師として一ケ年を過された先生の前途が如何に展開し行くかは、門下生たる当年の学生の予知し得ざる問題であつた。詩人も一個の人間である以上食わねばならず食わせねばならず、借金は返さねばならない。何て先生の自白された青楽の中にあつた通り詩人では暮らして行けない。それ故小説家として立つて行こう。かく決意転向を敢[illegible]のは自然の成行として[illegible]ものと思われる。初めて公にされた小説なるものは明治三十四年先生三十才の時「新小説」誌上に寄せられた「旧主人」と題する試作であつた。これは幾多の詩集が出版された後のことである。詩人から小説家に[illegible]つた先生の力作の数々に就ては世間周知のことだから別に言葉を費すの要がないが、茲に先生の歩まれた経路がサア、ウオーター、スコットという有名な詩人から小説家に転向して大成した人のそれと符を合せたように一致していると点を指摘せずには居られない。スコットはスコットランド人独特の負けじ魂を発揮し、藤村は信州人持前の粘ばり頑強さを働かせて共に不朽の労作を後世に遺す一方経済上の問題を見事に解決して一生を了つたのである。（二六、一一、七）

「東北學院七十周年史」

編纂の委嘱をうけて

花輪庄三郎

東北学院というものゝ実体――その伝統的な性格――を実証的に示そうとするならば、それは東北学院というものゝ歴史を以てするより他に途はあるまい。凡そのことと一定の過程を辿つた時、必ず過去の経験を反省しようとする。それは強ち過去の経験えの執着からばかりではない。過去を識ることに依つて今日の自覚を深め、更に将来えの新しい指向を定める力を得ようとするのが寧ろ主要な要求となつて現われるのであろう。

東北学院は来るべき昭和三十年を以て創立第七十周年に達するという。明治十九年の創立当初に立つて考えるならばよくも遥かな旅を辿つたものとも謂えよう。その七十周年を記念するものゝ一として、今度「東北学院七十周年史」を作るという、真に機宜を得た企であることは疑いない。他校の場合を見ても大抵の所には、三十年史乃至五十年史ぐらいはあるのが例である。わが学院が今回はじめてこの編纂に着手するというのは寧ろ遅きに失した憾みをさえ感ずるのである。

その昔、押川先生が烈々たる国士的な使命観を抱いて仙台神学校を興された創業の時代、これに次いで学院の歴史の大半を占めるシュネーダー院長の守成興隆の時代、更に出村悌三郎院長の難航の時代、同じく出村剛院長の難航から復興えの転換時代、而してアンケニー及び小田両院長の現時に至るまで、代を重ねること六代、それに創立以前の所謂胎動の時代を加えるならば、約一世紀に亘る年数であろう。その間わが学院の辿り来つた紆余曲折を仔細に反省するならば、必ずや複雑多端な意義と興味とを発見するに違いない。

明治維新以来の日本に於ける政治思想、宗教思想、教育思想等を直接背景として、保守主義と進歩主義、国粋主義と自由主義等の錯雑消長に伴い、学院経営上に加わる試練も一通りのものとは謂えまい。その中にあつて幾多の困難を克服しつゝ、創立者の高適なる理想を承け継ぎ人格主義の教育の牙城を守りつゞけて来たことは、一は天恵に感謝すると共に歴代院長をはじめ多数旧現教職員、同窓生及び内外後援者の協力の賜であることも銘記せねばならない。また今日の日本の教育基本法の冒頭に教育の目的を規程して「教育

会員名簿

残本あります御希望の方は申込み下さい。

實費　金百五十円
振替、仙台八八三